

科学と社会委員会 メディア懇談分科会（第24期・第5回）

議事要旨

日時：3月28日（木）17：40－19：00

場所：6階6－C(1)会議室

出席者：渡辺委員長、土生副委員長、山極委員、三成委員、赤坂委員、遠藤薫第一部会
員（オブザーバー）

1. 本日の分科会の議論について

・日本のメディアの強化について議論をしたい。政府、学术界（大学）、メディアの関
係は、どう変化しているか、今はメディアが弱くなってしまって、政府に対してもの
がいえなくなっているのではないかというのが問題意識である。それをどうにかして
改善していかなければならない。ひいては、学会会議、大学との問題にも関係するの
で、当分科会で議論が必要である。次に、産業界と市民が政府、学术界、メディアに
どうかかわっていけばいいのかについて、議論したい。

2. 遠藤第一部会員からの話題提供

・まずは、最初に学会会議第一部にある社会学委員会メディア・文化研究分科会につ
いて、遠藤先生から話題提供をしていただいた。

・遠藤薫第一部会員より、資料4「科学メディアの強化のために 学会会議は何を発信
すべき」について、ご説明いただいた後、意見交換を行った。

○メディアの現状と取り巻く問題点

・2016～2018にかけて調査した「あなたにとって重要なメディアは何ですか」の調査
結果グラフでは、テレビは横ばい、新聞の凋落が激しい。ラジオ、雑誌も横ばい、イン
ターネット情報（ニュースサイト）は伸びている。

・従来のマスメディアはプロフェッショナルとして情報を処理して、一般の人に伝えて

いていたが、インターネットは、普通の人たち、匿名の人たちでも同じように情報を送ることができる。拡散や炎上が起きるのは必ずマスメディアが介在している。インターネットに限らず、マスメディアが介在することにより、それがふくらみ、口コミや対面的なコミュニケーションで、ひろがっていく、こういう形で現在はメディア環境をとらえないと見当違いがおきてしまうことがある。

- ・メディアへの信頼度は、新聞、TV、インターネットの順番で、低下しているとはいえ、新聞への信頼度が高い。ただし、10年前と比較すると、新聞の信頼度は落ちている。

- ・メディア特性として、新聞は正確な情報が得られるが、多様な情報や重要な情報を得られるという点では、テレビに負けている。ソーシャルメディアは、面白い情報を得るとか、買い物や食事等の参考にするように多様に使われることが多い。否定的な意見としては偏った意見が多い。また、情報操作が多いというのは、新聞やソーシャルメディアよりテレビの方が高い。

- ・メディア全体として、すべてのメディアについて信頼度が今、どんどん落ちている。あるいは全ての機関についての信頼度が落ちていると言える。

- ・こういう状況で学術会議が情報発信を効果的に行うには、現在のメディア環境では、個別のメディアの力ではなく、それらを合わせた形でこうした特性を見極めた上でそれに合った使い方をして相乗効果を生むよう、戦略的に行う必要がある。

○学術会議の経験

- ・学術会議からの発信力を高めるためにメディア分科会がメディアに対して、どうしていけばいいか

- ・21-23期までいろいろ議論してきたが、今日紹介する3つのシンポジウムは、大講堂が満員で、立ち見が出るほど大盛況だった。

- ・「世界のグーグル化とメディア文化財の公共的保存・活用」(2010.1.26)では、情報学術の世界がグーグル化により侵食されつつあるなか、それに対して研究者、出版業、その他のメディア関係者はどのように考えていけばいいのかということの問題提起を行い、議論を行った。

・「東日本大震災と報道メディア」(2011.5.21)では、東日本大震災後、まもなくシンポジウムを開かせていただいたシンポジウム、東日本大震災に対して、報道メディアはどのように報道したのか、どのような役割を果たしていたのかについて議論を行い、災害時にメディアがどのように働いたのか、議論を行ったが、会場からは様々な意見が寄せられた。

・「マルチチュードと権力：3.11以降の世界」(2013.4.6)では、世界的に有名な研究者(ネグリ氏)をお呼びして開催したが、参加券にプレミアムが付いたという噂がでるくらい盛況だった。

・これらのシンポジウムの共通点は、多くの人に関心を持ち、何か問題が起き、タイミングよくシンポジウムを開催できたことである。また、タイムリーなことを並べるのではなく、新しい視点をシンポジウムに取り入れる意識があった。報告者も学術の世界にとどまらず、広く、若手や多くの方にご参加いただき、その他の組織との連携を行った。

○学術会議はだれに向けて何をどのように発信していけばいいか。

・例えば、日本の展望などを広く世間にしらしめるためにはどうしたらいいか。学術会議からの発信というのは、目的や誰に向けての発信なのか、何を言いたいのかということが会員である自分もわからないが、普通の人にもわからないのではないか。誰が見てもわかるように情報を出していないといけないのではないか。

もっと重要なのは、学術会議と言われても普通の人にはわからない。学術会議が内閣府の下にある団体であり、何か言っているということを誰がどのように聞いたらいいのか。現在のメディア環境の中では、顔が見えない状況ということは無視されることが多い。

また、媒体として何を使うか、現在は様々なメディアがお互いに影響しあう、だから、いったんそれがポジティブフィードバックに入ってしまうと、悪い言葉で言えば、炎上してしまう。これに入らなければ人々には伝わらない。炎上商法という言葉があるように、炎上させるくらいになると、マスメディアも動くし、どこもかしこも動き出す。政府でも炎上や拡散が起こったら、動かないというわけにはいかない。

- ・誰が発信するのか、明確な発信主体としては、学術会議に多くの会員がいるが、だれもが知っている日本学術会議会長から発信すれば、聞く方のもイメージがつかみやすいのではないか。会長名を付ければ、他の先生の発信も無視されることなくなるのではないか。

- ・今期は会長に依存するとのことによいが、来期は会長が誰もが知っているような人になるとは限らないのでない、来期以降も継続できる方策が必要である。

3. 意見交換

(主な意見)

- ・記者会見は、タイムリーな話題を提供しないとマスメディアは集まらない。
- ・提言等の意思の表出などは、210 人の会員の合意を取らなければならないので、タイミングが遅れてしまう。
- ・学術会議の会員個人がこう考えているというような意思の表出は可能だと思うが、そういう勇気のある会員がいるかどうか。
- ・全てのマスコミに働きかけるのではなく、例えば1社だけに働きかけるという方法もあるということなので、ある新聞社に働きかけたら、真剣に考えてもらえる。
- ・学術との親和性からいうと、マスコミにもニーズがある健康情報は、学術関係の人に話を聞きたいと思っている。
- ・外国では、自然に関する内容ばかりを流す学術的な番組もあるが、日本でいえば、NHK の E テレや BS のワールドサービスなどがある。国内では、NHK だからできるので、他の民報では費用がかかるので、スポンサーが見つからないとできない。

4. 次回以降について

- ・次回の分科会に NHK の方を呼んで、話を聞くということにした。
- ・シンポジウムを YouTube やニコ動で発信するのはどうか。
- ・TED の日本学術版をするのはどうか。委員会委員や若手アカデミーにお願いして、

日学版 TED をやってもらい、それをマスコミに取り上げてもらう。次回の会議までに
若手アカデミーに相談してみる。

以上